絶望した世界で

らふ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実世界に絶望した八幡はｓａｏで……

目次

望む道は ―――――――― 1
絶望の先 ―――――――― 7
第1節　価値観の違い ―――――――― 15
トールバーナ第一層攻略だと?! ―――――――― 21

望む道は

高校2年修学旅行に来ている。

そして、昨日奉仕部で依頼を受け遂行中である。

依頼内容は”戸部の告白のサポート”というもの。

但し、1人解せない行動をしているものがいる。

葉山隼人―いつも絵に描いたような笑顔を浮かべて仮面をつけている。雪ノ下さんといい勝負だろう。仮面をとった本当の姿を見てみたいものだ。

まぁなんか怖いからいいけど。

(戸部の告白かぁ～失敗するんだろうなぁ。失敗することを確定として、じゃあなんで葉山は中立であるような立ち位置にいるのか?そういえば海老名さんがあのあと以来に来たな男子の仲を保つようにという依頼。でも今見たところでは男子の仲は程よく保てているはず。もし、元々別の依頼を頼んだんだとしたら?それは”グループの維持”だとする。だとしたら、それは戸部の告白を未然に防いで欲しいという依頼となる。”それ”を遂行してしまうと俺の思いはどうなるのか?もしあいつなら許してくれるだろうか。もしなんて考えるだけ無駄か。もし俺なら、もしあいつならなんて幻想でし

かない確定事項でない限り推察の域を出ない。これが終わっ「ちよ、聞いてんのヒキオ！」

八幡「うわっ、なんだよあーしさん」

優美子「あーしさんじゃないし」

八幡「なんだよ三浦。俺今考え事してんだけど」

優美子「余計なことしないでよ!!」

八幡「あ？」

いやいきなり言われても。まぁ何のことかは大体検討がつくけど、どうせ今俺が読んでいる本のことだろ。残念（▪．▪／／）ファッショ「違うし」えちょ心読むのやめてくんない。怖い、怖い。てかこんなの着る人いんの？これとか、ぷぷっ……　くっ…

「ちゃんと聞いて」

八幡「うわっ……」ガサッ

・・・・タレント雑誌だと・・・　誰だよファッション雑誌とか言った奴。割とガチで着ようかと思っちゃったじゃん。

八幡「／／／／」

優美子「～～～～～から、嫌いなんだと思うそいうの。ねぇ、ちゃんと聞いてる??」

八幡「／／／／」「ねえっ!!」

うぉっ、びくったぁー

いきなり高い声上げんなよ。心臓に悪い。てか、俺我に帰るまで結構時間たった？って3分じゃん。恥ずかしさのあまり3分も気を失っていたのか、いやー失敬失敬、剣呑剣呑、ここが戦場ならきさましんでるぞ、とかいう声が聞こえてきそうだか。

「さわかったよ、余計な行動は極力控える」

「極力じゃなくてしないで」

「おーけー」

結論は出た。

俺は遂行するしかないだろう。

それが俺の答え、俺のやり方、あいつらなら、唯一理解してくれたあいつ達なら、きっと認めてくれる――――俺の求めていた答えはあの場所にあるのだからーー

その後葉山から色々言われて今に至る。
戸部の告白のサポート
葉山グループの維持
これを達成するためには嘘告白しかない。
あいつらなら、俺の行動を理解してくれたあいつらならわかってくれるだろう。

ーーーーーー上手く説明できなくて
止めろお前なら分かってくれるお前なら理解してるだろそうやってまた
ーーーもどかしいのだけれど
止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止め
ー貴方のやり方嫌いだわ
元から分かってたこれは幻想だ、俺が勝手に描いてただの願望だ。そんなもの俺がいつもいつも嫌ってた欺瞞だという事も。

それからというもの学校には行ってない。

理由としては虐めー恐喝、陰口、暴力などそして教師からは見ても目をそらすだけだった。

俺は世界の全てが欺瞞であることを知った。

そして、この世界から逃げるため、この腐った世界から消えるため、俺はゲームに入り浸った。

ＳＡＯ

ＶＲ技術搭載の最新のゲーム。丁度β版もやっていたため丁度いいと思った。小町からゲームばっかしてないで学校行ったら?と言われ目を背けると「学校で何かあった?」と言われもしたがもうこの世界には望むものはない。勝手に望んで、勝手に絶望するくらいならもうそのサイクル要らない。辞めてしまった方がいいんだよ全て。

これから起こる全てのことに期待を膨らませ不敵に笑んだ。

八幡「リンクスタート」

始まった。終わりの始まりが。

それから、同時刻同家では

「お兄ちゃんも買ってたよねこれ。丸くて黒いから、お兄ちゃんとか中二拗らせていた人にはどストライクだろうなぁ。とかそんなこと言ってたら始まったちゃうよ。」

戯言を吐き捨てながらも、颯爽と準備しそれでいて強い意志を持ち、何か目標がある

かに思われた。
　そう、兄の写真を舐めるように見ながら、
「お兄ちゃん。小町はお兄ちゃんのこと大好きだし、それはこれからも変わらない。だから、いつまでもどこでも一緒だよ。勝手にはなれないでよ。あっ今の小町的にポイント高い!!」
　妖艶な笑みを浮かべ、八幡とは別の意味で期待を膨らませながら起動発声する。
「りんくすたーとっ」
　……　言葉の意味は理解しているはずだ。多分。

絶望の先

「「やっと戻ってきたこの世界に」」
「「んっ?!」」
「「誰?!」」
「「キリトか（ハチさんですか）」」
八幡「キリトかよてか息ぴったりだったな」がしがし
キリト「そうですね。ちょっと嬉しくて」くるくる
ハチ「あぁ俺もだ」
それから、キリトとは暫くの間話した。内容はβ版との変更点などはあるのか、あるとしたらどこか、将又全て同じなのか。これに限らず、この世界への希望なども話した。話をしている内にキリトとはなんだかウマがあう感じがしたのは気のせいではないはずだ。多分知らんけど。
「ーーーちゃん達」
キリトとは同じぼっちの匂いというかぼっち特有の雰囲気みたいなものを感じたのだが、話してみるとなんということもない、ただの女子だった。

いや、だが、反応がいちいちあざといそう、例えば城廻先輩と一色を足したようなポワポワした守ってあげたくなるような雰囲気と相反する積極的な態度そして反応がいちいち可愛い。すぐさま告って振られるまである」

「／／ーーもうっ、馬鹿ぁ／／／」プシューー

「あれっ、……　もしかして……　声に出てた？」

あわあわ

「コクコク」

「すまん」ガシガシ

「全然いいよ、その代わりーーーして／／／」

「ん？すまん聞き取れなかった。もういっｋ「あんさんらむししとんとちゃうぞ」あ？」

「すまん、ワイハ”キバオウ”ってもんだアンさんらβテスターだろ、もしよかったらレクチャー頼めへんか？」

「いいですよ．ハチもいいよね！」

「ああ、俺も構わん」

「ありがとう」

「じゃ、早速狩りにいくか。」

如何にも弱そうな猪（ふ……ふ…クレイジーボア？とかいうらしい）それにしても関

西弁の子の青年、絶対リアルでは自己中心的思想で色々周囲が掻き乱されてそうだな、可哀想っ。まぁ、知らんけど、デレデレしすぎだろこいつ反応から見て多分４０代後半だと思うがキリトに手を出したら潰す、俺が徹底的に潰してやるよ。ククク。ククク。ククク「ストップ!!」

「キリト?どうしたそんな慌てて」

何かあったのか、周囲では不自然な事、事象は起きてないはずだが?あれっ。

「殺気!さっきが出てるよハチ。怖い、怖いからやめて!デスノートの主人公みたいなオーラ出てるよ。」

「んん?あれか?削除、削除削除削除削除削除削除削除削除削除ってかやらねぇよ」

「いやどっこいどっこいだよ」

「新世界の神になるとか言ってそうな雰囲気がでてるよ?なるのなっちゃうの厨二病患者に」

「ならねぇよ?!どんな奴だと思ってるんだ?」

「んー厨二拗らせてる人?計画通りとか部屋で言ってそう」

「んんんっ、そ、そんなこと、いってませぇんよ」

やべっ噛んだ。これ絶対言ってると思われてる。やばいやばい話そらさなければ、痛い奴で終わっちまう。

「それよりなんだ、結構上達したじゃねぇかきばおうさん」
「おうよ、なんだったら一人でボス勝てるで」
「いやそれはない」
「マジレスせんでもええんとちゃうん」しゅん
　いやいやあからさまにシュンとしてるじゃん効果音にしゅんって。俺は思わず謝る。
「えっあ、、いや、ごめんなさい」
「悪りぃな」
「っと、ちと落ちるわ、用事あるさかい」
「またな」
「じゃあね、きばおうさん」
「また」
「あれ、、、ログアウトボタンが、、、ない」
　この言葉に思わず黒い笑みを浮かべてしまう。
　だって、ーーーーーーそう言う仕様なのだから。
「どうしたのハチ、なんか黒いオーラが出てるよなんかもう如何にも悪役っぽい。コナンで言ったら黒い人だよ黒い人！」
「いや、全身黒い装備をしてるやつに言われたかねぇよ。でも悪役についてはあってる

かもな。いつも俺はヒールをかってきたからははっ。」
　言ってて悲しくなってきた。あれっ、いつの間にか目から汗が。
「言ってて悲しくなるなら最初から言わなければいいじゃん」
「いや、最初に話ふっかけてきたやつのセリフじゃないからなそれ」
　あーあ、話してる内に何故か殺意が湧いてくる。よく考えればあの奉仕部の体制は全て俺の独壇場だったわけであの馬鹿どもは何も活躍してないんだよなぁ。
「悪役じゃないよオーラが、魔王だよ。勇者殺しちゃダメだよ。」
「魔王は雪ノ下さんで十分だ。ってか、おまｅ「キリト」キリトはそんなメタいセリフ言ってていいのかよ。」
「いいのいいの、どうせ出すかもわからないような作品なんだから」
「論点がずれた、きばおうさんさっきの発言の真偽は？」
「本当だ」
　一応確認するが当然だろう仕様で元々ログアウトボタンなんて設けていないのだから。ＧＭコールしてでない時点でなんらかの可能性を考えろよ。
　運営の不備なら速球に対応するはずで、この世界でバグなんてほとんど存在しない。

　そして視界が行成塞がる。

始まりの街

だが俺の見える景色は街ではなく白いベールで包まれた清楚な部屋だった。

ーよう

ーー調子はどうだ

ーお前は聞かなくてもわかるだろ

ーはっ、そうだったな

ーーお前はこの世界を誰よりも好いているんだろうそんなことは聞かなくてもわかるし、お前のバイタル、精神状態が現実世界でのそれより良好なのは見なくてもわかるからな。

ーわかってんじゃねぇか。ってかそうなのか？

自分じゃワカンねぇかんな。そっちはどうだ。もうひとつの俺さんよ。

ーーんあ？あ、悪い呆けてしまった。なんだって？

ーいや、だから調子はどうかって

ーーいやいや、お前がそんなことを気にするなんて何かあったのか？

ーいやいや、俺だって人の心配くらいするっての。どんな風に見えてんだよ。

ーー中二拗らせた他人恐怖症。あっあとついでに偏執狂。
ーひでえレッテルだなそりゃ。まぁ、昔の俺だったらそうだったかもな。だが、この世界に来てからはー
ーーはっ、あくまでもここにきたおかげってか？
そりゃーようござんした。そろそろ時間だし行くわ。またな、もう一人の俺。
そう言って。白いベールもとい研究室のような部屋から脱する。最後に見えた、一室には、いくつかの脳がくるくると宙に回転している部屋があり、この場所の異常性を物語っていた。
「もうこの部屋とはお別れだな。お世話になりました。っても、長い間は使っていないし、それに対象物は人じゃないがな。
まっ、証拠隠滅のためにログもオールデリートするから、もう永久的にサヨナラなんだが。」
悪役さながらの風格を醸し出し、意地悪い顔を浮かべながらそれでいて期待に満ちた顔で部屋を去った。

これから起こる事は、交える二人。双方は極端に真逆であり。片方は天真爛漫、天津無垢で嘘などない世界だと思い生きてるような絵に描いたような善人。もう一人は、こ

の世の中は全て嘘と欺瞞でできていると本気で考えている世界を壊しかねない、物語で語るなら絵に描いたような悪人。この二人がどのように関わってどのように終わるのかはだれも予想だにできない。

語られることのない事象なのだから。

この戯曲は悲劇ですらない

第1節　価値観の違い

ちょっと、ねぇっ、ねぇってば起きて

ん、うるさいあと３０年くらい

そんなに寝てたらお爺ちゃんになっちゃうよ。ヨボヨボなんだよ、顔だけは端正なんだから、そのところちゃんと年齢に対する価値観改めないとダメだよ。目は腐ってるけど。

う、うるさいっ。後少ししたら目だって、このプログラムでも腐っている目だって、な、治る日がきっといつか、くると思うから。

きっといつか、って言っているあたり保証ないし第一その目がなくなったら、、、ねぇ、、言わんとしてる事はわかるでしょ。

つまり、そういうことさ。

いやいや、別の世界のキャラをいきなりぶっこまないでよ。びっくりしたー、似合ってなさすぎでしょ。キラッがフヘッに聞こえるよ。シェイクスピアだって、君は目が腐っているね。あっでも事実を言ってるまでであって悪意はない。とか言いそうだけ

ど。

俺が一言呟くだけでこんなにも糾弾されるとは、恐れ入った。ってか、どんな風に見られてんだ俺って。キリトのやつには、厨二拗らせているやつとか言われたが。もう神が何ちゃらとか、歴史的人物の真似事なんてしていないぞ。ふっ、もうそんなくだらない価値観は捨てた。

うーーーん、今でも中二病患者に見えちゃうのは気のせいなのかなぁ。あっ、わかった。中二病患っているやつには現実が見えてないことがままあるが、八幡はちゃんとわかっているから高二病だねっ。二階級特進だよ。よかったじゃん。ジョブチェーーンジ。テッテレー高二病患者!!

痛い、痛いよそいつってか俺だよな。俺も自虐ネタを披露する事は多岐にわたってあるが、雪ノ下よりも激しい侮辱には耐えられる気がしねぇぞ。何だよ存在否定って。酷すぎたろ。お前、”メンタルヘルスプログラムだろう?そんなことをのた回っていて大丈夫なのか?

大丈夫、大丈ぶい。平気だよ八幡!!

そう言いながらくるくると回る回る。その姿は秀麗なる花嫁の華麗なダンスのように見えなくもないが、回っているだけだし、何よりあざとい。これだから天然系あざとい科は嫌なんだよなぁ。曰くそいつらは、パーソナルスペースへずかずかと踏み入る。

曰くそいつらは、男子を男子だと思わない。曰くそいつらは、涙目上目遣いは交渉術だと心得ている。などとある。っておい、最後の何だよ。それ絶対一色の受け売りだろ何で俺の思考領域に入ってきてるんだ？

いつでも、先輩の脳内にはいろはの姿ありっだよーせーんぱーい。

うっ、頭痛くなってくるが、この際置いておこう。置いておかないと危険な匂いするし。また告白してもないのに振られそう。でも、あいつ俺がいじめられていても周囲の空気に構わず俺と一緒にいてくれた数少ない友人の一人なんだよなぁ。

そう思うと無下にはできないし、したくもない。もとより、戸塚、川崎、一色は大切な、かつ大事な友人なのだ。そんなことできるはずもない。

ん材木座？そんな奴知らん。

はっ、はちまーーん

うっ、脳内で抱きついてくる。何だよわかったわかった。ってか元々お前も大事な友人の一人だよ。そんな事はお前だってわかっていたはずだ。

そういうと、涙目だだだ、材木座はぐっと親指を立て消える。ってか、俺ゆいと話してたよな。

おーい？

ンなんでしょうか？もう行かないといけないので別れの挨拶くらいはしますが。

あっ、そうか、じゃあなまた。
またです。

そう言って直後眼を覚ます仕草をし、さも今起きたかのように装った。理由はある。それは
「あーーっ!!やっと起きたねハチ。遅い遅いよ。もう少しでキスするところだったよ？」
「おっ、、おい、そういうのは思ってても言わないもんだろ、正直恥ずいから。」
そう言いながら、顔が急激に紅色に染まっていくのを自分でも感じているが、顔を逸らし話題を変えて紛らわせようとした。つかなんでキスしようとするの？誰にでもするんじゃキス魔だよキス魔！
「つか、何でいるんだ？いや分かっていたし、だいたい理由も検討つくけどさ」
「だって、八幡寝たら起きるまでに時間かかるし、起きたら起きたで後６０年とか言ってまた寝るんだもん。もう一層の事永眠しちまえってね。あってもでも、今のは本当に思ってないから気にしないでね。分かってると思うけど。
だから、そばいて起こし続けることで諦めさせてるんだよ。精神ごと。」

「怖い、怖い、精神ごと諦めさせるとかどんだけ俺信用ないんだよ……泣くぞ、主に俺が。ってそんな事はどうでもいい、そもそも、６０年って増えてないか？しかも、精神ごと起こすってどんな起こし方だよ、母親だってそんな起こし方せず。一言だけ言ってもう起こしてくんないよ？」

「あれ？６０年じゃなかったっけ？あとあと、母親だってもう少し起こすと思うよ？それは八幡の親だからじゃないかな？」

それを聞いたとき直後に、思案した。愛されてないんだなぁ、俺って。あっ、でも一言声かけてくれるって事は慈悲はあるってだけでもマシかな。

だって、愛情は小町に注がれるんだからしょうがないじゃん。

「そんなことよりも、もういくぞ、一分一秒無駄にできないからなここは。」

所変わってーーーーー

うまくやっているみたいだね君は。君はいつも謙虚だがやるときはやるみたいだ。少々人間関係に難があるみたいだが、そこを取り除けばすごい人でしかないよ。将来が期待できる。僕と違ってね。

しかし、君の周囲の人間はろくでもない人間ばかりだったみたいだね。少しばかり同情するよこれは。

君が聞いたら絶対に嫌がるだろうから言わないけれど。居るんだよ、この世界にも何

人か君の見知った人間達が。

だから、応援しているよ。ハチくん

ｅｐｉｌｏｇｕｅ　ａｎｄ　第１話　ｅｎｄ

トールバーナ第一層攻略だと?!

ふぅー

疲れたー小町助けてーあっここ現実じゃないんだっけ?余り現実と相違ないから気づかなかった。そんなことより……

出てこい!!俺のマッカン!!

マックスコーヒーと言う名の糖分の塊を一気に飲み干す。

そういや前に、キリトのやつに進めた時……

「ん?なんかシンプルな配色の缶だね!美味しいのそれ?」

「おう!千葉県民はみんな飲んでる。元気出るぞー。この暗い世の中ではな……」

「もう!そうやっていつも悲観的になる!ダメだよ。ダメダメ。そんなんじゃいつまで経っても腐ったままだよ?主に目が!」

「ううっ、このダークマターが疼く……」

「うん、厨二だね!」

「……やめてーー暗い過去が蘇るぅーーーー」
「まぁ、いいから飲んでみるね。見た所普通のコーヒーみたいだけど……」
　そうやって、缶コーヒーを開ける。ぱかっ。
「ごくっ、ごくっごく」
　あああー一気に飲み干しちゃったよこの子。やっちゃったーやっちゃったー。それにしても、なんかエロい。いや、飲み干す仕草が。こいつ子供っぽいのにそう言う所ちょっと大人っぽくなるんだよなぁ。不思議。そしてごちそうさま!
「うっ、ううううぅ」
「ご判定は……!!
「甘苦しいわ!!!」
「とても甘いと言うことで、星つけるなら……!!
「星一」
　ってなったんだよなぁ。なんでこのくらいの甘さがちょうどいいじゃん。そうだコーヒーは苦いと言う価値観が間違っているんだ。そうだ俺は悪くない。コーヒーが苦いと言うのが間違っているんだ。俺は広めたい!このマックスコーヒーと言う神なる飲み物を……またキリトに厨二とか言われそう。
　厨二は材木座だけで事足りてるっての。」

ＹＵＩぃーー

はーい　なんでしょうか？ぴきぴき

ーん？なんかぴきぴき言ってるけど大丈夫？

大丈夫かどうかと言われますと、大丈夫ですが。あなたは少し感情というものを知った方がいいですね。たとえば、怒りとか怒りとか怒りとか怒りとかあと怒り!!!

ーあっ、（相当怒ってる。なんで？俺なんかした。ずっと仕事してたしよくわからんけど。たまに女ってよくわからんところで怒るよな。例えば［（以下略］以下略するなーー!!なんで、なんでもっと自分語りさせてーーー!!」

なんか頭悪そうな言葉喋ってますけど大丈夫ですか？近所迷惑になる上キリトさんが見たら厨二って笑われますよ。ぷっくく

ー……お前もすでに笑ってんじゃねぇか。キリトが笑う前にお前が笑ってるじゃねぇかー!!

ぷっ、すいません。ついつい、笑ってしまいました。じゃあこれでおあいこって事で。

ーん？何がおあいこなんだ？？？？？？

それよりも!!もう時間なのでバイバイです

ーあっもうそんな時間か！おっけーまたな。

じゃ、［キリト］によろしく!!

ん?あいつキリトって呼ぶっけ?いつもキリトさんとかいってなかったか?まぁ、何かあったのかもな。気持ち的に。

…八幡がその意味に気づくのはだいぶ先になりそうだ。

ぴろろん☒

……この音聞いてうざいと思うのは俺だけだろうか?絶対チャットメールつったらアルゴしかいねぇんだもん。キリトとはほぼ毎日一緒にいるし?ん?俺フラグ立ってる??モテ期きたーーー

とかはしゃぐのは二流だぜ、一流は誰にでもあるんだろうなぁと受け流す!!これ基本だから!!教科書でるよ!!っと、そういやアルゴアルゴ。ん?アルゴアルゴアルゴアルゴゴルゴゴルゴゴルゴゴルゴゴルゴ。んんん?アルゴアルゴアルゴアルゴアルゴアルゴゴルゴゴルゴゴルゴゴルゴごるっ

瞬時にに振り向く。曲者っ!!!何いつの間に!!この部屋は鍵が閉まっていた筈だ。

「殺し屋ですが……」

俺の額にはチャカが……

ってゴルゴじゃねぇか!!!!!
あっ間違えたアルゴじゃねぇかーー!!!
「君には説教が必要みたいだナ。人の名前で遊ぶなと聞いたことがないのカ？私としちゃあこのままばーんでもいいんだゼェ？」
「ふっ、やれるものならやって……」
ばきゅん
も、木材がえええええええ？ここって剣だけの世界じゃなかったっけ？あれあれ？打てんのそれ？レプリカじゃなかったの？ちなみにレプリカだったらネタ武器であったはず。
ここで勝てる手段は……
ないな。じゃあはいせーのっ
「すいませんでした。もう二度としないんで見逃してもらえませんか？」
「その額に穴開けたらナァ。……にゃはははははははは、嘘だよ嘘。打つわけないじゃん。あははははははは。やべ素出ちゃった。」
「へぇ、やっぱアルゴそれ演技なんだ」
「誰にもいうなよ？」
「馬鹿言う相手いないっうの。」

「違う違うキリ坊に言うなっていってんノ。あいつに言うとそんなかたぐるしい喋り方だと疲れるでしょ。ちゃんと素で喋ろうね（ナイフ。とか言って脅してくる事請け合いだよ。」

「そうだよなぁ、キリトっていかにもゲーマーって感じだから、なんでも剣で語り合おう的な展開になるよな。そのフルーツは剣で勝った方が貰う!!みたいなっ。」

ともあれ、本当にキリトの性格はゲーマーって感じで、女の子には似つかわしくない。うむ。なぜキリトは女なのに戸塚は男なんダーーー!!!

「はー坊今なんかすごい頭の悪そうなそれでいて、性変換シローーみたいな波動を感じたのだが」睨み目

「何その波動????まぁ、ともあれ……そろそろ行かないと時間まずくない??」

そう今日は!

「あっ、そうだったナ。それじゃ、行くゾ。

トールバーナへ」

初会議の日だ。

「あーっ!きたきた。おーいこっちこっち」

元気よくキリトが言う。ってか、はしゃぎすぎじゃね。あのおっさんとかめっちゃ睨

んでんぞ。ほら、あの隅にいるやつとか「目は腐ってるのに、目は腐ってるのになんで私より……」とか言ってるよ。怖っ。やめて、ぼっちは視線に弱いの。だからここは……

「よーし、ここらで聞いてるか」

「ソダナ。ってか、私帰っていいカ？」

心底帰りたそうに言うがなんで？君が帰ったらほんと心細いんだけど。それに、もっと大切なこともある。例えば、ベータテスターへの糾弾の時に庇うためのカードとかな。

「はーい。ちゃんと聞いてようなー」

「子供扱いするナ。おねーさんは君よりも年上だゾ♡」

「あんまり、年上に見えないからなーそれ。」

アルゴはクネクネしてる。いや、ほんとクネクネしてしなをつくっている。地味にエロい。あっ、てか……

「ちょっと」（＊、ω、）

そう、忘れてた。キリトの奴いたんだった。

「二人だけいい雰囲気になってずるいずるい」

「ん？既にハー坊とは、お・と・な・の関係だゾ♡」

「え……じゃあまさかあんなことやそんなことも」
「しちゃってたり♡」

「ま……まさか……ハチ?」
「いや、違うからな。こいつがお前をからかいたいだけだからな。」
「なーんだよかった」ε―（´∀｀；）
「おねーさんは何時でも本気だゾ♡」
「ややこしいこと言うなっ」
　そう言いながら頭をグリグリする。グリグリグリグリグリ～
「痛いっ。痛いぞハー坊。そこらへんで……だから痛い。もうしないから……やめて」（T　・　T）
　畜生。なみだめ上目遣いでそう言われるとなんかグッとくるものが……そういえば、会議に来てたんだった。やべー。
　ソコチャントキイテルカー
「はい」
　なんか喋ってるので聞くとするか。アインクラッドで初の会議。そして、２ヶ月もだってようやくの第一層攻略。絶対荒れるぞこの会議。

「はーい。それじゃあ始めようか。俺はディアベル。職業は気持ち的にはナイトやってる。」

気持ち的にはって……じゃあ俺はシャドウアサシンとかか?目腐ってるし。敵の背後からとどめ刺すタイプだし。人から見つけられないし‥‥なんか言ってて悲しくなってきた（＞＿＜）

ジョブシステムナンテナイダロー

ワッハハハー

アノメガクサッテルヒトガ……

っ?!最後の何???

「さておいて、先日俺たちのパーティがこの階層の最上階へ続く道を発見した。つまり明日か明後日にはボス部屋に辿り着くって事だ。」

周囲が少しざわめく。俺も遅いと思ってたけどようやくか。マッピングってやっぱり難しんだな。うん、八幡やったことないからわかんなぁい。キモいしやめよ……

「ここまで一か月かかったけど、俺たちは示さなきゃならない。ボスを倒し、このゲームはクリア可能だということを、はじまりの街で待つみんなに伝えなきゃならないんだ！そうだろみんな！」

そして再びざわめきそして拍手が起こった。ってか……材木座に声似すぎじゃね

???イケメンでそれで協調性もあってって……材木座いらなくね（笑）
むぅ　はちまーん（＞＜）
だからー脳内に出てくるなってのーーーー!!ゴメン!ごめんから離れてーー!!
そして、周囲が盛り上がってる中低い声が流れた。
「ちょお、待ってんか、ナイトはん」
ん?んん??んんん?あれってーーーー
そうして広場に広場の中央に現れたのはーーー最初レクチャーした男〝キバオウ〟だった。
でたーーーーモヤッとボール!!!不謹慎だな。本人の前で言うのやめよ……
「わいはキバオウってもんや!ボス戦前にこいつだけは言わしてもらうで!」
ディアベル「こいつっていうのは何かな?」
キバオウ「こん中に五人か十人、今まで死んでった二千人にワビ入れなあかん奴がおるはずや」
ディアベル「・・・キバオウさん。君の言う『奴』ってのは、元βテスターの人たちのことかな?」

キバオウ「決まっとるやろ。β上がりどもは、こんクソゲームが始まったとたん、ダッシュではじまりの街から消えよった。大勢のビギナーを見捨てて、な。奴らはうまい狩場やらボロいクエストを独り占めして、ジブンらだけぽんぽん強うなってその後もずっと知らんぷりや」

ニュービーと元βテスターの間で溝ができていることは知っていたが、こいつもβテスターを嫌うやつの一人か。こりゃあ、めんどくさいことになりそうだな。

キバオウ「そいつらに土下座さして、貯め込んだアイテムや金を吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預かれへん、わいはそう言っとるんや！」

分かってないみたいだな。ベータテスターの有用性と、いかにベータテスターが攻略の鍵を握っているかが。そもそも、これは一人でやっていくゲームじゃないんだ。俺だってそんくらいのことは分かる。その中で唯一無二の存在であるベータテスターが情報を持っていることだってある。それに経験者なんだから素人よりは強い。単純な事だ。

まぁ、否定的になってもしょうがない。手札もあるしな。どう使おうか……

「……」

キリトが下を見て俯いている。やっぱりベータテスターだからって非難されるのは

辛いよな。俺もそういう事が……あり過ぎて……

よしまずは手札の確認。

1．まず初めにキバオウ本人を俺たちがレクチャーしている

2．２０００人の全ての人間が、初心者ではなく８０％の人間がベータースターであり、最初のナーヴギアを無理やり頭から外した等で死亡した人数を数えるとそう多くない。

3．ベータテスターたちの情報を集ってハンドブックを書いている。

4．ベータテスター達は初期ロットなので１０００人しかいないはずである。

うーん。これだけの情報があれば余裕だし、騒ぎにしてことを大きくしたくもないので、温く行くか。

「キバオウさんよ……」

「なんじゃわれ!!」

キバオウは怒ってそう言うが、構わない。全員に視線を向け、俺は被っていたフードを脱ぎ捨てる。かっくぃー俺!!

「俺の顔覚えてないかい?」

覚えているはずだ。何せ、こんな〝腐った目〟そうそうあるもんじゃ無いからな。

言ってて泣きそうだけれども。

「お、お主は……誰だっけ？」
「おおおーーーーい!!!!」
瞬時に空気が柔らかくなり、笑いが広がる。
プッククク
アイツカッコツケタノー
メハクサッテルノニ
だから最後のなんだよ。
「ま、まぁ覚えてないにしても此奴は覚えているはずだぜ。お前も覚えてるだろキリト」
「うん……覚えているはずだよ。キバオウさん」
「あっ、お主は最初にレクチャーして貰った……キリトとハチか!!!」
「そうだよ。で、ものは相談なんだが……ちょっときて」
「ん？なんや??」
周囲に聞こえないようコソコソ声で話す。これは聞かれたらまずいからな。
「で、キバオウさんよ。俺も一応ベータテスターなんだが」こそこそ
「それじゃ話にならんだろ!!」
「落ち着いて落ち着いて。で、相談なんだが、今村で配っているハンドブックあれには第一層までの情報しかまだ書いていないだろ？」こそこそ

「まぁ、そりゃそうだろな。なんせまだ1層をクリアできていないもんな。」
「そこなんだが、俺の情報網には、２５層までの情報がある。そして、その情報は未だ俺しか知らない」
「な!?信じれるかそんな話」
「キリトとアルゴに聞いてみるか?その時点でアイツらにバレるから交渉決裂だけど……それにキバちゃんの言ってる話だとベータテスターのせいで死んだってなってるけど、違うんだよ」
「は???」
「ベータテスターは確かに始まりの街からすぐに出て効率のいい狩場に行ってその場所を独占したかもしれない」
「だが、死亡数の比率はベータテスターの方が圧倒的に多い。」
「な、なんやと?!それでも、わいの仲間達は始まりの街で……会う前に……死んだんや」
（＞＜）
「そうかもしれない。ベータテスター達が皆をレクチャーしていたらそうならなかったかもしれない。だが、現実は残酷だ。」
「そもそもの話ベータテスター達はが何人かしっているか?」
「そ、それは、こんなかに２０人いれば少ない方じゃないのか?」

「ちがう。そうじゃないんだよ。こん中には１０人程度しかいない。いや１０いたら多い方か。」

事の次第に気づいたで、ギバちゃんは唖然とするような顔を見せる。

「じゃ、じゃあわれは……」

「そう、なんてことしてんだってな。だけどまだ取り返しがつく。コルは払えないけど、俺がベータテスター分のコルを払ったって事にしといて、仲間達には次いでにこの先のハンドブックも奪って置いたってことにしとけ」

「あ、ありがとう（＞＜）お主がこんなに優しいやつだったとはな。でもそれだとお主が悪者ってことにならないか？」

「俺は優しくなんてねぇよ。周囲が冷たいだけだ。あと俺が悪者にされるのは慣れてるからどうって事ない。じゃまた何かあったら。」

「おう、また何かあったら頼らせてもらうよ」

手を振りながら去っていくキバオウを見ながら。俺も変わったなと独りごちる。

そう、昔だったら正論を言い並べて、それこそ雪ノ下のように、そして俺の卑屈な言い方を混じえて言い負かしていただろう。だから、俺は変わった。この短期間で変わってしまったのだろう。

こんなんじゃ、明彦さんに顔向け出来ないな。

「彼奴のお陰で目が覚めたわい。みんな命がけなのに我はベータテスターに死ねと言うとるようなもんやからな。ごめん。皆!!」

イイヨー

キニスルナー

メガクサッテルノニィー

だから最後の何なんだよ?!?!?!

怖い怖い。

「キバオウさんも心変わりしてくれたみたいで良かったよ。じゃ皆6人ずつでレイドを組んで!!」

や、やばい。ぼっちの俺には誘う相手なんて……いたわ。キリトいたわ。ほんと忘れてた。

「むぅ。ハチ!!?!さっきから私全く喋って無いどころかこの話始まって挨拶くらいしかしてないよ」(?。ロ?)

「ごめんごめん。てかメタイから。それは、話作るのが下手な作者に言って!!俺じゃどうしようもないから!!」

ほんとだよ。この話始まって以降俺の視点しかないよ。ずっと、喋り続けてるんだよ俺!勘弁して!

「まぁ、それはさておき。パーティ組むよね？はち??」
「いや、俺はその日あれがあれでして……「組むよね」ちょっと用件が「組むよね？」
……はい。」
無力だなぁ俺って。
「それにしても、嬉しかったよ。ハチがキバオウさんを説得してくれて。嬉しかった。だから、ありがとう」
「お、おう」
不意に寄りかかって来るので驚いたが、しばらくこうしてよう。此奴と寄りかかっていると何故か安心する。体が熱くなる様な、それでいて少し儚いような。大切な奴だ。絶対にこの手で守り通す。例え裏切られるようなことがあれど。
「あっ。あの人もハブれてるよ！ハチ誘ってきて！」
「俺かよ!?俺だぜ俺、コミュニケーション能力皆無の俺だぜ？その俺に任せるってのか??」
「そうだけど……じゃこれも勉強だね。行ってきてー」
「勉強で片付けちゃったよ。はぁ、しゃあねぇ行ってくるとしますか。」
立ち上がりハブれていてそれでいて……さっきから腐った目を連呼してくるあのはぶれをちょっと誘ってくるか（怒）

「おい、そこのフード」
「何?」
「ちょい、ツラ貸せや」
「強盗なら帰って。金目のものなんて何も持ってないわ」
「違う違う。俺とパーティ組まねぇか?ってことだよ」
「ヤンキーみたいな目をした人と組むパーティなんてないわ。帰って頂戴。」
「んだとごらぁ（怒）ヤンキーみたいな目って、もうちょっとつつめよ」
「あら、そう?じゃあしょうがないわね。深海魚みたいな目をした人が私になんの用?」
「包んでないよ!!ずっと酷くなってるよ!」
「ふふっ。包めるものが無さそうだから。つい。」
　なんだか、こいつと話してるとユキノシタを思い出すな。まぁ、あいつとは性格も風貌も全く違う所か、多分性別も違う。
「まぁ、いいや。あぶれてんだろ?お前も」
「あぶぇてなんかない。周囲がみんな組む流れになったから自然と1人になっただけ。」
「ふっ、それを人はぼっちと呼ぶ」
「あなたと一緒にしないで。なんか厨二病って言われそう。」

「やめて、初めて会った人に厨二呼ばわりされたの初めてだよ。」
「自覚があるの自覚が無いよりいい事だよね」
「俺は厨二じゃないぞ」
「自覚があるのは自覚がないよりいい事だなんて思ったら大間違いだよ！」
「なんかさっきより酷くなってる?!」
俺は厨二じゃねぇ!!え?違うよね??キリトにもそう言われてるけど。俺、材木座と一緒にされるのは嫌だよ（＞＜）
「何故か、あなたと話してると気が休まるわ。」
「そうかい、じゃパーティ組むぜ」
ウィンドウを開きパーティ申請を送る。んっ??こいつアスナってのか?見間違えか？
違う、やっぱりアスナだ。いや、あのアスナじゃないだろう。あれから時間もたってるし顔も変わっているはずだ。何せあのアスナだったら合わせる顔がない。
「アスナってのか。よろしくな。あとあいつもパーティだから挨拶くらいしとけよ」
「あまり、宜しくする気は無いけど、よろしく。挨拶くらいするわ。それと……なんで私の名前を?もしかしてストーカー?」
「違う違う。ほら上に見えるだろ。そこに名前が書いてある。」

アスナは上をむく仕草をする。ほんとに見えてんのかなあ。そのフード被って。
「あぁ、あなたははちって言うのね。じゃあ、あの子にも挨拶してくるわ。」
「じゃあ、俺はちと眠いから。風呂入って寝る。キリトにもそう伝えといてくれ。」
「今、なんていった??」
「ん?だからキリトにも伝えといてくれって」
「じゃなくてその前。」
何なんだ?はちまんよく分からないよ。
「風呂入って寝る?」
「そうそれ!!お風呂あるの?」
「俺のうちは特別性だがらな。他の宿にもあるところはあると思うけ……「行かせて。君の家に」……」
うん。何を言ってるのかな!?勢いで喋ったんだと思うけど。何を言ってるんだ此奴は。まぁいいけど。友達んち泊まる感覚でおけーですよ。友達居ないけど（ｔωＴ、）
兎にも角にも俺のＳａｏは絶対間違っている!!